

文芸作品の英訳の自己評価の可能性

宮崎 充保

キーワード

等価, (自己) 評価, コミュニケーション, 翻訳プロセス, 文化受容

1. コミュニケーションと評価

翻訳論(学)は新しいとは言えないが、翻訳そのものが文芸評論や語学教育の道具に使われたり、翻訳者に多くのクレジットが与えられなかったりして研究領域を形成しがたかったことは事実であろう。しかし、近年では、翻訳論が研究領域を形成するほどになっていることも確かである。そうした中、Jeremy Mundayは2001/2008年に *Introducing Translation Studies: Theories and applications* を著し、翻訳論の変遷を俯瞰している(翻訳は鳥飼玖美子監修『翻訳学入門』東京:みすず書房, 2009年。訳語はここから借用する)。自分は翻訳論の地図のどのあたりにいるかがわかるようである。その中で、著者はKatharina Reissの functional theories of translation (機能的翻訳論)を紹介している。Reissは、等価(equivalence)につながる問題を論じながら、source text (ST, 起点テキスト)の言語機能に関する「特性」を“informative”(情報型); “expressive”(表現型)¹⁾; “operative”(効力型)の3項目に分類して、target text (TT, 目標テキスト)の評価はコミュ

1) 文芸作品は「情報型」「効力型」「表現型」を3頂点とする三角形の中では、他の頂点とは離れて、「表現型」の頂点近くに位置する。Reissの説明は、The TT of an expressive text should transmit the aesthetic and artistic form of the ST. The translation should use the 'identifying' method, with the translator adopting the standpoint of the ST author. (Munday 2008: 73-74)

「表現型テキスト」は、言語機能では表出機能(送り手の態度を表現)を持ち、言語特性は審美的で、テキストの焦点は形式重視であり、あるべきTTは審美的形式を伝達するものであり、翻訳方法は原著者の観点を採用する。(鳥飼2009: 112, Munday 2008: 73)

ニケーションレベルであることを示唆する。

Katharina Reiss's work in the 1970s ... views the text, rather than the word or sentence, as the level at which communication is achieved and at which equivalence must be sought (Reiss 1977/89: 112-14 in Munday 2008: 72).

最後の文は、コミュニケーションが成立したとき、等価がどのように追求されていたかが見えると取ってよいだろう。

私は、これまで、翻訳は<コミュニケーション>のレベルで捉えることを論点としてきた。Lefevere は、翻訳が行われるときに現れる問題解決について解決の意思決定 (decision-making) をしなければならないレベルを4つ挙げる。重要度の高い順に ideology, poetics, universe of discourse, illocutionary language (1992: 88-89)²⁾ だとする。コミュニケーションの問題は成立可能性の不確実さ (不透明さ) にあり、翻訳レベルの意思決定がなされれば、コミュニケーションとして TT が成立しうるのはどのレベルかが決まってくる。つまり、翻訳者は TT を想定してその TT 文化の audience (読者) と向き合いながら、イデオロギーのレベルでは、審美的なレベルでは、談話の成立するレベルでは、いや言語使用のレベルでは<通じ>させなければならないという問題に直面することになる。³⁾

評価は、翻訳のプロセス、プロダクト、受容 (読者) のレベルでなされなければならない。文芸作品の<評価>は、長い時間を経て知的大衆の認知を得ることでなされる。それは、プロダクトと受容 (読者) レベルでの評価が主に行うであろう。プロセス評価では、現代世界の価値変遷のめまぐるしさ

2) Translators have to make decisions over and over again on the levels of ideology, poetics, and universe of discourse, and those decisions are always open to criticism from readers who subscribe to a different ideology; who are convinced of the superiority of the poetics dominant in their time and culture; and who are dissatisfied with the strategies translators have chosen to make universe-of-discourse elements intelligible or more easy to intuit. (Lefevere 1992: 88)

3) <通じる>ことについては、宮崎 (1992, 1993) ですでに扱っている。

の中で、翻訳時に解決しなければならない上に挙げた4つのレベルで問われる価値が、めまぐるしい時間の経過のうちに変わり、色あせてしまう可能性は十分にあり、価値体系は“unintelligible” (Lefevere 1992: 87) になる場合もあり、そうならないための問題解決としての評価が必要になる。翻訳が生まれるためには、プロセスでの評価（意思決定）は迅速になされなければならない。また、プロセスの評価は、プロセス自体が要請して来る。でなければ、次のプロセスへ進みそこでの問題解決につながって行かない。そこに自己評価の必然性が生まれて来る。Lefevere はそれを“decision-making” としている。これは翻訳時の問題解決なので翻訳者によるいわば自己評価とも言える。もちろん、プロセスの評価は後日、翻訳者の翻訳時の頭脳環境に入ることでなされる。

本論では、Reiss と同じく、翻訳は<コミュニケーション>レベルで行わなければならないとする。TT（翻訳）は audience（読者）との間にダイアログが成立すれば、つまり、理解（認知）されれば、コミュニケーションは成立したとして、改めて認知される。コミュニケーションが成立するということは、TT がその文化内に audience を持つことを意味する。またそれは、ST（原典）と TT（翻訳）に等価性が認められることでもある。コミュニケーションの側面から言えば、TT 文化の中で ST が認知されれば、<評価>もすでになされていると考えてよいだろう。⁴⁾ コミュニケーションが成立するということは、認知や理解、TT 文化、評価などと言ったさまざまなレベルの問題を一挙に解決してしまうことなのである。

本論では等価を生むべくして行われるコミュニケーションレベルでの翻訳、そして、コミュニケーションを成立させるための言語使用の（自己）評価のあり方を翻訳のプロセスの面から模索する。

4) Lefevere (1992: 114-131) は作品としての TT が target (receiving) culture の中でどういう役割を持つようになるか、そこまで TT は分析されなければならないという項目の中に、authority, expertise, trust, image, audience を挙げて論じている。

2. 翻訳のプロセス

Burton Raffel (1994) は散文の翻訳プロセスの評価は以下の図式の項目でなされるとしている。

choice of words (lexis) → movement of words (syntax) → style

これは、一般的なプロセス原則でもある。簡単に言えば、語彙選択をすればその選択が語順決定に大きく影響する。語順が決まれば文となり、その集まりの文章固有の文体が決まって行く図式である。STとTTが等価として捉えられる、言い換えれば、audienceを持つに到る模索をするのは、lexis, syntax/grammar, style/register の一つひとつの基本的なプロセス項目において、TT文化の audience に理解してもらうために意図して作り出す表現効果を生み出す営み、あるいは、illocutionary language でST文化独自の universe of discourse を生み出す営みをする事である。その営みは、翻訳者がたえず翻訳プロセスで意思決定を通して自己評価をするための問題解決をすることでもある。

かつて、宮崎 (2004) はこの図式を日本語が non-Western language であることを考慮して、movement of words の項目に修正を加えた。

語彙選択 → ST の文節の区切りによる TT でのシタックスの生成 → 文体

というレベルを設定して、散文詩の私の翻訳 (TT) の評価を試みた。

「語彙選択」では、散文詩であるがゆえに、詩としての出自を持ち、イメージ喚起、比喩、押韻による重層的な意味の構成など、さまざまなレトリックを作り出す語の選択を意識的 (時には、無意識的) に使ったことを分析した。シタックスのレベルでは、散文の出自を持つために、線的な論理関係の表出のあり方、また、文レベルのレトリックに注目して分析した。そ

のとき、文および文章形成にかかわる、ST（日本語）での文節数とTT（英語）での意味の最小単位の数を調べ、その差がなにを意味するかに関して分析しながら、等価の妥当性を検討した。

こうした分析もあり得る。と言うのも、Reiss (1971: 54-88) も intralinguistic criteria (言語内基準) として挙げる、semantic, lexical grammatical and stylistic features⁵⁾ (Munday 2008: 74) という項目も Raffel の図式と類似しているが、これを含めて検討したとき、対象の散文詩の翻訳プロセスではSTからTTのなかに等価を生み出そうとする営みがあったことが見られた。その意味でコミュニケーションレベルでの評価は成り立っていたと言えるだろう。

私は山本周五郎の作品をこの数年、以下2点に留意して英訳してきた。一つに、中井久夫が述懐するように、作品に心おどりしないなら翻訳は出できない。⁶⁾ 私が単純に江戸文化好きなのかも知れないが、山本周五郎は、私にとって面白い作品を書いた作家である。二つに、この翻訳が何の役目を持って生れてくるのかを考える。山本周五郎の作品を取り上げることで、まだ誰も翻訳したことのない、作品に描かれる固有のローカルな文化の翻訳者になり、いまだ世界が知らないローカル文化を世界へ発信する。もしその発信がどこかで受信されるなら、ローカル対グローバルの対立項がなくなり、共有や共感の場ができる。それが翻訳に出来る役目であろう。

であれば、作家あるいは作品に好意を持つ項目、また世界に対してローカルを発信できる項目を拾ってみて、その項目を拠り所にして自己評価ができないかを考えてみる。はなはだしく個人的である。だが、<コミュニケーション>を成立させるに到る溝を飛び越えるためには、自分がいちばん説得

5) もう一方では、extralinguistic criteria (言語外基準) として、situation, subject field, time, place, receiver, sender and 'affective implications' (humour, irony, emotion, etc.) を挙げる。

6) 折口信夫を引用して「『心おどりしない仕事をしてはいけないよ』と……つねづね弟子にさとしたそうだが、たしかに読んで『心おどりしない』ものの翻訳は引き受けないのがよからう。やっついて素漢たるものだし、読む人が『心おどり』するはずもない」(中井 1985)

力を持つやり方で接近するしかない。そしてクリプキの言う「暗闇の中での跳躍」をねらうのである。飛び越えることができることで、TTは相対化され、一個人の好みの領域から離れることができる。それによって、設定した項目が飛び越えられるための、すなわち、コミュニケーションが成立するためのルールとなるのである。

この作家と作品に関心が寄せられて、固有のローカル文化として世界に発信できるのは、以下の点からである。

- 現代語で時代物というのは、2つの cross-cultural な側面を持つ。地理的に英語圏と日本との違いで感じる異文化感、通時的に江戸時代と現代という同じ日本でありながら、時代が異なるために感じる異文化感という2つの側面である。
- 2種の言語（方言）によって作品は出来ている。武家物に出て来る「武家ことば」と、町人物（世話物）の「町人ことば」江戸弁の使い分け。一つの作品に武家と町人が混じり合うと、2つの言語が混在する。
- 江戸の町人文化、武士の身分、組織、制度など文物のめずらしい面白さがある。

こうした、いわば、ローカル（起点）文化がTT（目標）文化で理解されるとき、どのような言語操作が行われるのか。翻訳行為は言語使用行為である。したがって、言語操作や処理の<適切さ>が評価の対象となる。Tim Parks (1998) は、英語の modernist writers のイタリア語への翻訳の評価を上と同じように、lexis, syntax, register (style) のレベルにおける言語操作から生じて来る TT の ST からの「乖離」、また、ST から TT のなかでは「失われるもの」について分析し、文学作品の翻訳の評価を実践する。乖離や喪失が翻訳にはつきまとう。その理由を、Parks は、

True, its deviations often then atrophy into conventions of a recognizable poetic discourse, but it is a characteristic of the most dynamic literature to deviate even from these. (1998: 4)

と述べる。これは、target language (TL) が source language (SL) に負けてしまい、equivalence (等価性) が求められない側面を言っている。粋のいい文学は、翻訳は難攻不落だと言うのである。Modernism の言語表現がすでに SL の standard discourse から乖離・逸脱していて、詩的喚起力 (poetic evocation) を獲得しているのである。Parks は、あえて、modernist writers (SL) の翻訳 (TL, イタリア語) を扱うことで、イタリア語の standard discourse になじまない SL の言語操作の〈あからさまな〉側面に焦点を合わせて、分析をやりやすくすることに成功している。

Parks が「言語使用にたいしての敏感さから来る適切さや達成を評価する」⁷⁾と言うように、私は自身の翻訳プロダクトを振り返り、プロセスの段階で TT 受容文化にたいして言語操作を適切にしたかどうかを見る。そして、それが、山本周五郎のローカル文化を世界に理解させ得るかの可能性を評価する。言語操作の〈適切さ〉をプロセスのなかで分析し、そのプロダクトが TT として受け入れられるものかを模索しようとするものである。

以上の3項目に加え、次の項目は文化的側面からの評価項目ではなく、山本周五郎の作品にしばしば現れる文体的な特徴を評価項目とするものである。文体的特徴が TL に反映されているかどうか、それはコミュニケーションを成立させ得るものか、したがって等価性を持つものか、を評価しようと言うものである。

■ 山本周五郎の独特な文体のうち顕著な2点。

7) Even more problematically, discussion of a particular translation inevitably leads to *assessment of aptness and achievement based on our sensitivity to language use*. (1998: vi, italics mine)

- ・語りの多くが登場人物にゆだねられる，それは臨場感のある文体効果を生み出している。
- ・文の息が長い。読点が少なく，どうかすると一つの文が句点で切られるだけで，ずっと繋がって行く。このことは生の発話に近い文体効果を生み出している。

そのために，時制の錯綜があり，時間的順序がそのまま並べれば英語の時制でもおさまらない。また，対話と地の文の仕切りの稀薄性がある。

これらの項目に関して，私の翻訳実践から材料を求めて分析を試みる。使う材料は，本論のために翻訳した“The Swallows”（「つばくろ」）を使う。ただし，それでは材料が足りないので足りない分は，武家物と町人物が混った“The Story of the Mulberry Trees”（「桑の木物語」）から採ってくる。⁸⁾

3. 翻訳実践と分析

ここでは，言語操作の適切さに関して言えば，自己評価の可能性が見られるかを模索する。

1) 2つの異文化の側面と文物

【Text 1】

その頃は世の中が一般に爛熟期といったぐあいであって，貧富の差もひどく，人情風情も荒れていた。貧しい多数の人たちが飢えているのに，富裕な者はその目の前で贅沢三昧をして恥じない。武家でも富んだ町人から持参金付きの嫁や婿を入れて，それがさほど稀なことではなくなっていた。

At that time, the world in general was enjoying the acme of matured culture and society. Discrepancies between the rich and the poor were deplorably wide. People had gone wild in their humanity and morals. A great number of poverty-strick-

8) 翻訳は「つばくろ」は本号に，「桑の木物語」は「英語と英米文学」49号 山口大学 2014年に所載。

en people were famished, whereas rich people indulged in luxury in the face of those poor people and were never ashamed. Sons and daughters from the samurai class got married with those rich sons and daughters from the working class who brought a dowry. And marriage across the classes was not rare any more. (*Swallows*)

時代風潮を描くもので、江戸時代も現代も同じような風潮が示される。時代そのものの異文化としての特異点は、階級社会でありながら、経済的には身分の低い町人が身分の高い武士を凌駕している時代であることを“*across the classes*”で明示する。

それがさほど稀なことではなくなっていた。

And marriage across the classes was not rare any more.

【Text 2-1】

彼の新しい生活が始まった。そのなかでまいったのは、行儀作法というやつと学問であった。一日いっばい着物を着て、袴をつけて、小さいけれども刀を差して、そうして歩くにも坐るにも、姿勢をきちんと正していなければならない。——眼を正面へ向けて静かに歩く、坐ったら胸を張って両手を膝に置く。言葉は明瞭簡単に要点だけ云い、決してむだ口をきかない。食事はおちついて、皿小鉢や箸の音をさせない、くちやくちや嘯むなどはもってのほかである。もしこれらの禁を犯すと、すぐさま「悠二郎——」と、父の叱咤がとぶのであった。

His new life began. In the new life what made him raddled were manners and learning. He had to be formally geared all day long in kimono and hakama, and swords on his waist even though he was only a boy, and in either walking or sitting, he had to keep bolt upright. — He had to walk quietly with his eyes set straight in the direction he walked. When he sat, he had to place both hands on the knees, chest thrown out. He had to talk distinctly and plainly and only in the gist of what he had to say, no idle talk whatsoever. When he ate, he had to be quiet, making no

noise of the plates or dishes or chopsticks. Making a noise as he chewed was out of the question. If he forgot those manners, words of his father's scolding flew at him at the drop of a hat: "Yujiro —." (*Mulberry*)

里子に出されていた主人公土井悠二郎は、江戸の下町浅草でさんざん自由奔放な町人の子として幼少時代を送ったが、七歳で突然、要職につく武家の実家へ戻され、武士の子として生きることになる。武士の礼儀作法は悠二郎にはまったく覚えのないものだった。その作法が列挙される。その列挙は畳みかける表現効果を持つので、英語でも列挙 (juxtaposition) の方が明快であろう。SL と TL の構造を比較する。_____と_____の部分と比べてみるとすべてではないが、ほぼ、列挙する文構造を再現している。列挙による畳みかけは "he had to (do)" の並列的繰り返しを表している。

着物を着て、袴をつけて、刀を差して、そうして歩くにも、坐るにも、姿勢をきちんと正して

He had to be formally geared all day long in kimono and hakama, and swords on his waist even though he was only a boy, and in either walking or sitting, he had to keep bolt upright

眼を正面へ向けて静かに歩く、坐ったら 胸を張って両手を膝に置く。

He had to walk quietly with his eyes set straight in the direction he walked. When he sat, he had to place both hands on the knees, chest thrown out.

言葉は明瞭簡単に要点だけ云い、決してむだ口をきかない。

He had to talk distinctly and plainly and only in the gist of what he had to say, no idle talk whatsoever.

食事はおちついて、皿小鉢や箸の音をさせない、くちやくちや囁むなどはもってのほかである。

When he ate, he had to be quiet, making no noise of the plates or dishes or chopsticks. Making a noise as he chewed was out of the question.

[Text 2-2]

悠二郎は手早く袴をぬぎ着物をぬいで、「母ちゃん、おいらの着物出して呉れよ」こう云いながら髪のももほどいた。

「そいから頭も前のようにして呉れねえ」

「まあ坊ちゃんそんなこと仰しちゃったって、まさかあなた」

「いいから好きなようにしてやれ」虚木老はこう云って笑った、「——半年も辛抱した息抜きだ、好きなように暴れて来い」

筒袖の脛っきりの袴に三尺、頭もちよいとひっ括っただけの、実にさばさばした恰好になった。

「わすげえ、こいつはすげえや」

彼はとびあがって叫んだ。

「腰んところが軽くて軀が浮いちゃいそうだ、屋根まで跳びあがれそうだ、わあすげえ、——母ちゃん、吉べえいるかい」

Yujiro hurriedly tore off his gear and said, "Mom! Get me my robes." As he said so, he untied his hair, too.

"And do my hair the way you did to me."

"Young master, you ask me so, but by any chance, are you...?"

"Do as he likes," old man Kyoboku said and laughed. "— For a good half year he's been patient. This is a breather for you, Yujiro. Run and romp as wildly as you like."

Now he was in a romper's lined kimono with tight-sleeves which came down only to the elbows and the kimono was tied with a waistband. His hair was lumped together and knotted only once. He came out simple and neat.

"Cool! This is real cool!"

He yelled, jumping for joy.

"My waist's real light an' so I could float in the air. I could jump up to the roof. This is cool! — Mom, is Kichibe'e in?" (Mulberry)

【Text 2-1】 とは反対に悠二郎が町人生活に一時戻るときの場面である。武士と違って町人に武士ほどの行儀作法がないことはテキストのイタリック体が示している。ここで注目したいのは、悠二郎の口調が武士ことばから町人ことばに変わることである。はつらつとした形式張らない口語になる。命令文、感嘆文が出てくる。丁寧さを欠く代わりに親しみが出て、抑えることなく感情をあらわにしている。

「母ちゃん、おいらの着物出して呉れよ」

“Mom! Get me my robes.”

「そいから頭も前のようにして呉れねえ」

“And do my hair the way you did to me.”

「わすげえ、こいつはすげえや」

“Cool! This is real cool!”

【Text 3】

幸助が倒れてからまもなく、まわりの人々がおいちに縁談をもってきはじめた。おいちはまだ十三であったが、一人娘だから形式だけでも婿を取って、いちおう相続の届けを出すのが常識である。

A while after Kosuke had been taken ill, people around them began to broach marriage offers. Although o-Ichi was still as young as thirteen, it was common practice that even nominally the only daughter of the family would have a husband who was adopted into her family by marriage and then notify the authority of succession. (*Swallows*)

武士の家系を保つためには娘しかいなければ婿養子をもらう。⁹⁾ それを「常

9) その反対は――

――どうせ二男坊のことだ、つまらないようなところの養子にするより、いっそ本人がよければ船頭にでもなるがいいのさ、にんげん一生、あれはあれで気楽でもあるし、

識である」としているが、ここでは、“It was common practice”として、その“practice”を TL では説明する。その説明が長すぎて情報過多に陥ってはいないか。SL を文節で、TL を最小の意味単位で区切ってみる。

おいち／まだ／十三で／あったが、／一人娘だから／形式だけでも／婿を／取って、
／いちおう／相続の／届けを／出すのが／常識である。

(文節数13)

Although/ o-Ichi was/ still/ as young/ as thirteen,/ it was/ common practice/ that/
even nominally/ the only daughter/ of the family/ would have/ a husband/ who
was adopted/ into her family/ by marriage/ and then/ notify/ the authority/ of
succession. (意味単位20)

「婿を取って」だけの表現が英語では.....を補足するなど決まらない。文節数と意味単位数の比では13：20の大差がそれを説明している。TT は推敲によってもっと効率的に表現される必要がある。押し付けずにわかってもらわなくてはならない。

【Text 4-1】

彼女は貧しい鉄砲足軽の一人娘だった。

She was the only daughter of a poor foot soldier of the gun squad, (*Swallows*)

【Text 4-2】

父は老職で勘定奉行を兼ね、兄は左門となのって納戸方吟味役になっている。

なかなか粋な商売だからな。

— *He's the second son, who's got no chance to succeed his father in this family. Therefore, it will be much better to be a boatman than to be adopted into a samurai family of sorts by marriage. Being a boatman is a trade that is easygoing for his entire life and can be a trade which is pretty rakish, I tell you.* (Mulberry)

次男以下は武士の家では家督相続権がないことを、補足情報として新しく TT には挿入する： who's got no chance to succeed his father in this family

His father was a senior councilor cum the commissioner of finance. His big brother was renamed Samon and had the responsibilities of a judicial and criminal investigator to the store room. (*Mulberry*)

この2つのテキストは、武家の職位（下線）を表すもので、TT文化との整合性は薄い。多くの場合、翻訳者は改めてSLに相当するような表現を作り出す造語（neologism）に頼るしかないであろう。ここでも、【Text 3】と同じような非効率さが見られる。

【Text 5】

「おほしめすところあって今日より無役に仰せつけられる、御幼年よりの精勤を嘉賞あそばされ、お手許より金五十枚、御垢着、ならびに生涯三十人扶持を下しおかれる」

“The lord has his plans and you will have no responsibilities as of today. Your devotion since the lord’s young age has been admired and you will be presented with fifty pieces of gold from his private account, a set of garments, and lifetime revenue in rice for thirty retainers per month.” (*Mulberry*)

江戸時代の褒賞のあり方である。その細目が興味をそそる。「金五十枚」は大判や小判であろう。「御垢着」は、現代の運動選手の（汗付き泥付きの）ユニフォームが尊ばれるのと同じであろう。「三十人扶持」は給与の現金支払い制度である。これは、翻訳を説明文（explication）にするしかないがそれでは締まりを失う（→「生涯三十人扶持」）。締まりを求めると意味を犠牲にしなければならない（→「御垢着」）

金五十枚 fifty pieces of gold

御垢着 a set of garments

生涯三十人扶持 lifetime revenue in rice for thirty retainers per month

また、役人の役目上の発話なので、非人称化や第二人称を主語にすることで、その権威の響きを作ろうとしている。

御幼年よりの精勤を嘉賞あそばされ、お手許より金五十枚、御垢着、ならびに生涯三十人扶持を下しおかれる

Your devotion since the lord's young age has been admired and you will be presented with fifty pieces of gold from his private account, a set of garments, and lifetime revenue in rice for thirty retainers per month

【Text 6】

正満の家は三条丸にある、そこから下北丸の自宅まで帰るには、大手道と的場跡をぬけるのと二つある、

Masamitsu lived in Sanjo-Maru, from which to get back to his home in Shimokita-Maru, there were two ways. One way was to follow Ote Road and the other to go through the ex-archery range. (*Swallows*)

SLの地名をTLのなかでどう反映させるかはむずかしい。「国会議事堂前」という地名を“Kokkaigijido-Ma'e”としてよいものか、「福岡」を例えば、“Rich Hill”としてよいものか、表意文字(SL)から音を汲むか意を汲むかは、議論の別れるところだろう。「三条丸」「下北丸」「大手道」は築城を訳出するのか、「的場跡」は地名と取るのか、文脈を考えながら必要に応じて音か意かを決める必要がある。ここでは、文脈が要請する程度の翻訳に留めて、TLでは、上に示すように、3通りの翻訳、音、意、音+意、を提示している。音訳でも“-Maru”の表記は2回の繰り返しが何らかの意味を背負うことを示唆するかも知れない。

(音) 三条丸 Sanjo-Maru 下北丸 Shimokita-Maru

(音+意) 大手道 Ote Road

(意) 的場跡 the ex-archery range

2) 方言

【Text 7-1】

「話したものでどうかちょっと迷っただけけれど、とにかくほかの事とは違うからね」

吉良節太郎はつとめて淡白な調子で云った。

「なんでも梅の咲きだす頃からのことらしい、七日おきぐらいに逢っていたというんだが、そんなけぶりを感じたことはなかったかね」

「まるで気がつかなかった」

「だって七日おきぐらいに外出していたんだぜ」

「願掛けにゆくということは聞いていた、たしか泰昌寺の観音とか云っていたように思うが」

「それが不自然にはみえなかったんだね」

“I hesitated a little bit about whether or not to tell this to you, but anyway, it's different from usual matters. It's special, mind you.”

Yoshinaga Setsutaro tried to sound as flat as possible as he continued:

“I hear it started sometime around the time the plums began to bloom. The rendezvous took place almost regularly every seven days. Didn't you ever have a sense of something ... anything going on?”

“No, no nothing at all.”

“But you should have — the outing took place as often as every seven days.”

“I was told that she was going to the temple to pray for something or other. Let's see ... as far as I can remember, she said she was going to pray to Kwannon the Goddess of Mercy in the Taisho-Ji Temple.”

“Didn't it look unnatural?” (*Swallows*)

この物語の冒頭部分である。武士の親友同士の会話だが、それにはそれなり

の文体 (register) がある。ここは地方のある藩であるが、その地方特有の方言は SL では会話には反映されず、標準語の口語で行われる。山本周五郎は武士の会話に地方の方言を交えない。方言を用いない SL は TL にも変換しやすい。親友の親しさを表す箇所を抜いてみる。

「……とにかくほかの事とは違うからね」

“... but anyway, it's different from usual matters. It's special, mind you.”

「からね」は TT では繰り返す同義表現（下線）を置き、文末に “let me remind you” の口語形を用いている（イタリック体）。

「……そんなけぶりを感じたことはなかったかね」

“... *Didn't you ever* have a sense of *something ... anything* going on?”

「まるで気がつかなかった」

“No, no nothing at all.”

「だって七日おきぐらいに外出していたんだぜ」

“But you *should have* — the outing took place as often as every seven days”

「それが不自然にはみえなかったんだね」

“*Didn't it* look unnatural?”

SL では語尾に感情や話者の態度が込められていることが多い。「かね」と相手に問いかける質問の響き (“Don't you ... a sense of something ... anything ...”) に親しみ (“Don't you” という否定疑問文) がある。(それにたいしての返答は、文法を破った “no nothing” という口語を用いる。)[だって……んだぜ]と諫めるような口調を “But you should have (a sense of ...)” の補足によって表している。「んだね」にも英語では否定疑問文を用いることで親しみを出す。

【Text 7-2】

「——わかった，よくわかった」

正篤はやや長い沈黙のあとでこう云った。

「——生きられる限り生きよう，おまえの云うとおり，大事なのは生きることだ，悠二郎，——おまえだけは，どんなことがあってもおれから離れて呉れるな」

「どんなことがありましても」悠二郎は証しを立てるように云った。

「——この世は申すまでもなく，あの世へも，決してお側を離れは致しません」

“— I got you. I fully understand.”

Masa'atsu said after a little long silence:

“— I will live as long as I am allowed to. As you say, what matters is to live, Yujiro. — Please don't leave me no matter what comes my way.”

“Over my dead body, my lord,” Yujiro said as if he took a vow.

“— Not only in this world but also in the hereafter, will I not leave you alone.”

(*Mulberry*)

同じ武士同士でも，ここでは領主と扈従との対話である。そこには，主従関係を表す言葉遣いがなされる。

「——わかった，よくわかった」

“— I got you. I fully understand.”

は扈従にたいしてすぐれた口調で，しかし同じ繰り返しでも二度目は品格を表す。領主にたいする扈従の言葉の丁寧さはここでは，“my lord”の呼称で出す以外，手立てを講じていない。

【Text 8】

「いい若いしがなによ，たまにはなか（吉原）へでもいってらっしゃい」

などと，きいたふうなことを云う。

「偉そうなこと云ってもだめよ、悠ちゃんなんか、梅干の種を鼻の穴じゃないの、——
くやしかったら芸妓の情人でもつくってごらんなさい」

「なによ云やあがる、こっちあ屋敷が本所にあるんだぜ」

悠二郎はむきになって口を尖らす。

「お屋敷が本所だからどうしたのよ」

「べらぼうめ、本所から深川はひと跨ぎだ、なあ信さん、こいつあなんにも知っちゃ
あいねえのさ、へ、可愛いもんさ」

「そんなら家へ伴れて来たらしいじゃないの、そんなお馴染みがあるんなら伴れてい
らっしゃいよ」

「べらぼうめ、こちとらあてめえのおっこちを見せまわるほど浅黄裏じゃあねえや、
嘘だと思ふんなら自分でいって聞いてみな、櫓下へいって当時こちらで信さんと悠さ
んに深間のお姐さんはどなたでござんすか、——こうきけば猫の仔でも教えて呉れら
あ、ざまあみやがれ」

「そんならそっちへいったらいいじゃないの、こんな家へなんか来たって面白かあな
いでしょ、いらっしゃいよ、すぐ舟のしたくさせてあげるわ」

おみつはくやしそうに唇を噛む。

「おう待ってました、松吉にそいって呉れ、門限があるんだから早いとこ頼むって
な」

“Where do you think, young gentlemen, you're dawdling? Sometimes Naka (Yoshiwara, a red light district) is a place you should prefer to be.”

She would say a thing like that. She was like a cheeky girl that she was.

“Don't make a pretense of what you aren't. You shoved the stones of plum pickles into your nostrils, Yu-chan. — If it's a defeatist talk, then why don't you make a sweetheart of an entertaining woman?”

“Who're you to say stuff like that? This here Nobu-san lives in Honjo, don't ya know?”

So saying, Yujiro pouted, worked up.

“He lives in Honjo, so what?”

"Absurd! It's just a step from Hojo to Fukagawa. Look, Nobu-san, this here girl doesn't know nothin' 'bout nothin', I tell ya. This a chit of a girl."

"Well then, why not bring her to our place? If you've got a crush on her, bring here."

"That's absurd again! We ain't such rustics as to show 'round our own gals from red light quarters. If ya think it's a lie, ya go ask yerself. Go to Fire Watch Tower in Fukagawa (where prostitution dens were) an' ask 'em like this: May I be excused to ask, nowadays, of the entertainers, the ones who are in love head over heels with the gentlemen called Nobu-san and Yu-san? — Ask this way an' even a kitten'll tell ya. Hey, serves you right."

"Well then, why not transfer yourselves there? It isn't fun at all to come by a place like this, is it? Go. I'll get a boat ready for the young gigolos here soon."

O-Mitsu was harried and bit her lip.

"That's what we wanted. Tell Matsukichi, we've gotta get back before curfew, and tell him to make haste." (*Mulberry*)

江戸弁、「べらんめえ」、遊里訛りのまざった、江戸町人ことばでの会話が展開される。悠二郎は領主（下町では身分をかくし信さんで通っている）とともに、かつて悠二郎が里子に出されていた浅草六軒町の船宿「舟仙」に遊びに来る。「舟仙」の娘おみつは悠二郎にとって兄妹と少しも違わない。会えば、その仲の良さが口の悪さになってあらわれる。そのときの会話である。

「べらぼうめ、本所から深川はひと跨ぎだ、なあ信さん、こいつあなんにも知っちゃあいねえのさ、へ、可愛いもんさ」

"*Absurd!* It's just a step from Hojo to Fukagawa. Look, Nobu-san, *this here girl doesn't know nothin' 'bout nothin', I tell ya. This a chit of a girl.*"

SLのイタリック体が「べらんめえ」の特徴を表している。時代は江戸であ

り、領主を連れてのおしのびであり、現代のように、“fuck” “fucking” のような cuss words を羅列させるわけには行かないが、口の悪さは表出する必要がある。TL では SL の字義に近い表現 (“doesn't know nothin' 'bout nothin' ") か、字義とははなれた表現 (“Absurd!", “I tell ya”, “This chit of a girl.”) を当てている。同じようなことが下でも見られる。

「べらぼうめ、こちとらあてめえのおっこちを見せまわるほど浅黄裏じゃあねえや、嘘だと思ふんなら自分でいって聞いてみな、槽下へいって当時こちらで信さんと悠さんに深間のお姐さんはどなたでござんすか、——こうきけば猫の仔でも教えて呉れらあ、ざまあみやがれ」

“That’s absurd again! We ain’t such rustics as to show ’round our own gals from red light quarters. If ya think it’s a lie, ya go ask yerself. Go to Fire Watch Tower in Fukagawa (where prostitution dens were) an’ ask ’em like this: May I be excused to ask, nowadays, of the entertainers, the ones who are intimate with the gentlemen called Nobu-san and Yu-san? — Ask this way an’ even a kitten’ll tell ya. Hey, serves you right.”

このくだけで、もう一つ特異であるのは、べらんめえの丁寧語であろう。遊里で使われる方言が出て来ることである。それを下線で示した。“Let me ask you” と言わずもったいぶって “May I be excused” で問いかけを始め、信さんと悠さんを “gentlemen” と呼んでいる。しかし、「おっこち」「浅葱裏」「深間」「お姐さん」に相当する TT の言葉はないだろう。訳語のない文物と同じように、説明口調にするか、それらしい表現に言い換えるしかない。

簡単に方言の翻訳に触れておく。方言はその土地特有の言葉であり、他の地方との言い換えはできない。『砂の器』(映画)に出て来るずうずう弁は東北で使われるからずうずう弁であり、出雲に出て来る音韻体系のそっくりな方言はずうずう弁に聞えても出雲弁であって、東北と同一に扱えないと国立

国語研究所の所員に語らせるのと同じように、どこかの方言を、べらんめであれば粋のいい Cockney を当てるわけにも行かないし、Carson McCullers を始め南部を舞台とする作品に使われるアメリカ南部訛りを当てる、あるいは、John Steinbeck の *The Grapes of Wrath* に見られるようなアメリカ中西部の訛りを当てるわけにも行かない。TT 文化の読者はかえって奇異な感じを持つだろう。べらんめえは、「てめえ」に見られるように、音韻に reduction (短縮) や assimilation (同化) が起きて生まれている場合が多く、特別な語彙は別として、英訳するには、ぎりぎりの reduction や assimilation を含んだ英語を用いるほかない、と私は考える。¹⁰⁾

10) ただし、次のテキストは、「葛西からきた」という江戸から見れば田舎である。アメリカ南部の田舎訛りの感じを持たせてもよからう。

「こんな赤ん坊っておら見たこともねえ」

葛西から来た乳母はいつもこう云っていたそうだ。

「なんたってすばしこくって、ちっとも眼がはなせねえ、寝たかと思っちょと立ったら、いつのまにかもう土間へおりて下駄をしゃぶってるだ、ほんとにこの子には肝煎っちゃうよ」

"I ain't of seen a baby like this."

This was what they would always hear the wet nurse say.

"Look at him, *he as quick and nimble as any*. I can't take my eyes off of him. *I takes leave of him* fer brief moments, thinkin' *he done fallen* asleep, and *I finds him nibblin'* a geta, yeah a wooden-soled shoe, after he got down to the dirt floor before *I knows* it, ya know. Really, *this here baby make me* sit on thorns." (Mulberry)

その他に、ここで、幼児語も挙げておく。幼児語は語彙数が話の内容分だけ整わないこと、音韻が未熟であることを SL から TT に移す。

「たあたま、ごちゅびよちゅう」

と云う、春の頃はごちゅびよよよだった。御首尾よろしゅう。

"Darry, *I ho evrifi go wel*," Daisuke said ...

In the spring, it was "*Ho ev'fi weh weh weh weh*." I hope everything will go well. (Swallows)

幼児語であるが、現代では(方言は別として)つかわれなくなったことばが使われる。次の「きいき」は「キイキは幼児の言葉で病気という意味です」(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1429534724: 2015.1.17) だそうである。時代の隔絶感を出すために、そのまま TL でも用いた。前後の関係から意味は簡単に取れる。

「重たい重たい、きいきがよくなったから重たい重たい、……」

"Heavy, heavy. You got over your kiiki and you're heavy, heavy..." (Swallows)

3) 山本周五郎の独特の文体

【Text 9】

①松助は呻くような声で云った。三之助は自分とおいちとの関係を語ったのである、それは高雄がおいちから聞いたのと同じもので、彼は自分が庶子であることもうちあげた。……江戸へ養子にゆくことに定り、ゆくまえにひと眼だけ逢いたいと思ひ、逢うと一度では済まず、二度三度と重なるうちに、こんどは離れることができなくなりたいきさつ、それも隠さずに語った。

②——高雄の計らいで猿ヶ谷へ来て、おいちと二人になったとき、自分はすぐに気がついた、自分の気持は恋ではなかった、母のように、姉のように慕っていたのである、愛情というものを知らなかった自分に、おいちが初めて、この世でたった一人、愛情を示してくれた、……生れて初めて、愛情のあまやかさを知り、寛やかな心の喜びを知った、そうしていかなる犠牲をはらっても、おいちを奪い取りたいと思ったのである、だがいざ望みどおり二人だけになったとき、自分にはおいちの手に触れることもできなかった。

三之助はこう云ったということだ。

「③おいちどの自分には母親であり姉である、おいちどの気持も恋ではない、母が子を、姉が弟を、勲り庇う愛情にすぎない、……ここへ来てから二百幾十日、おいちどのゆき届いた介抱を受けて、自分は初めて人間らしい、やすらかな、心あたたまる日を過ごした、初めて生れてきた甲斐があったと思った。④……森さまはこう云ってお泣きなされました。⑤医者も云うとおり、自分はせいぜい今年いっばいの寿命だろう、おいちどの潔白だ、あのひとは昔から自分の哀れさに同情していた、無法な懇願を拒むことができなかつたほど深く、親身に同情してくれたのだ、不貞な気持などは塵ほどもなかつた、あのひとの潔白は神仏を証に立ててもよい、……⑥’ (⑤) あのひとを頼む、自分が死んだら紀平家へ戻れるようにしてくれ、あのひとを不幸にしないように、……このとおりだ、……⑦森さまは枕の上に顔を伏せて、泣きながら、この爺に頭を下げて、お頼みなされたのでござります」

① Matsusuke talked as if to moan. Sannosuke came out with the relations between him and o-Ichi, which proved the same as o-Ichi had told Takao. He also disclosed

that he was an illegitimate son ... It had been decided that he go to Edo to be adopted. Before he left, he had wanted to see her, just a bit of her. He had met her and wanted to see her once again, and they had met for the second then third times, until finally he had been unable to leave her.

②— When, by Takao's arrangement, he came to Sarugatani and got together with o-Ichi, Sannosuke soon found out that it had not been love that he had desired of her. He had longed for a mother and a big sister in o-Ichi, who was the only woman who had shown affection to him. He had not known what affection was. For the first time in his life he had known the sweetness of tender care and the pleasure of generous heart. He had thought he would take her by force, whatever the cost. But when left alone with o-Ichi as he had wished, he could not even touch her hands.

Matsunosuke said Sannosuke had said like this:

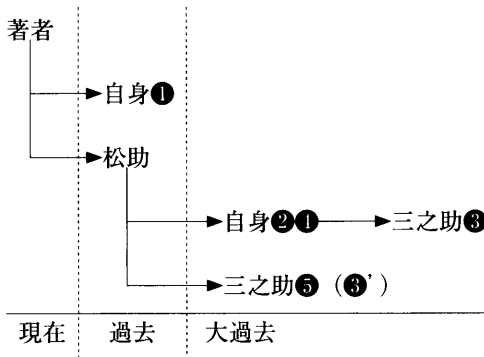
“③ O-Ichi is a mother and a big sister to him. Her feeling isn't love for him. But it is affection she has for him like a mother cares about and protects her son and a sister her little brother. For the past two hundred and several dozen days, he has received warm care from o-Ichi and he has spent peaceful and heart-warming and human days for the first time in his life. For the first time indeed, he felt he had something to live for... ④ So honorable Mori said and wept. ⑤ According to the doctor, too, his life will be good till the end of this year at the most. O-Ichi is innocent. She has from the beginning sympathized with his wretchedness. She has been so deeply and tenderly sympathetic she has been unable to turn down his lawless importunity. She hasn't had a shred of unfaithfulness. He can swear by God that she is innocent... He says: ⑥ Please take care of her. When I die, will you take care to make arrangements so she can go back to the Kihira family? Don't make her unhappy. I entreat you, ⑦ Honorable Mori, in tears, face on pillow, bent down to me, this old man, and asked me to look after her.” (*Swallows*)

妻おいちの森三之助との不倫と見ている夫の高雄は従僕の松助を付けてやっ

て猿ヶ谷の湯治場へおいちと三之助を出す。松助は不倫の手助けをしたくはない。しかし、湯治場で暮らす二人は不倫のかけらもなく清く過ごす。それを松助も認め、高雄のもとへ戻り、二人の潔白を報告して、おいちを呼び戻すように高雄に説得する。そのとき、二人の関係を上のような話法を用いて作者山本周五郎は自ら、また松助に語らせる。

その談話の構造を図示し、そこで発話される時間（本来の時制）を当ててみる。文中に入れた丸数字は発話の種類を表している。それを下の図のなかに入れる。

図中では、テキストの発話の時間帯は過去から大過去の時制に入るべきものである。確かに英語の時制の論理ではそうなるが、歴史的現在や、さまざまな話法を用いて、表現者の意図に合う時制に変えて行く。英語でも論理どおりに時制が用いられるのではない。いったん、時間枠を設定すれば、発話者の時間の意識を自由に変えることができる。



①松助は呻くような声で云った。三之助は自分とおいちとの関係を語ったのである。それは高雄がおいちから聞いたのと同じもので、彼は自分が庶子であることもうちあげた。……江戸へ養子にゆくことに定り、ゆくまえにひと眼だけ逢いたいと思ひ、逢うと一度では済まず、二度三度と重なるうちに、こんどは離れることができなくなりたいきさつ、それも隠さずに語った。

① Matusuke talked as if to moan. Sannosuke came out with the relations between him and o-Ichi, which proved the same as o-Ichi had told Takao. He also disclosed that he was an illegitimate son ... It had been decided that he go to Edo to be adopted. Before he left, he had wanted to see her, just a bit of her. He had met her and wanted to see her once again, and they had met for the second then third times, until finally he had been unable to leave her.

①では、作者が自身で物語の出来事を語っている。SLが示唆しない表現効果はねらう必要がない。

②—高雄の計らいで猿ヶ谷へ来て、おいちと二人になったとき、自分はすぐに気がついた、自分の気持は恋ではなかった、母のように、姉のように慕っていたのである、愛情というものを知らなかった自分に、おいちが初めて、この世でたった一人、愛情を示してくれた、……生れて初めて、愛情のあまやかさを知り、寛やかな心の喜びを知った、そうしていかなる犠牲をはらっても、おいちを奪い取りたいと思ったのである、だがいざ望みどおり二人だけになったとき、自分にはおいちの手に触れることもできなかった。

②— When, by Takao's arrangement, he came to Sarugatani and got together with o-Ichi, Sannosuke soon found out that it had not been love that he had desired of her. He had longed for a mother and a big sister in o-Ichi, who was the only woman who had shown affection to him. He had not known what affection was. For the first time in his life he had known the sweetness of tender care and the pleasure of generous heart. He had thought he would take her by force, whatever the cost. But when left alone with o-Ichi as he had wished, he could not even touch her hands.

②では、松助が三之助の口調を借りて回顧するように間接話法で語る。したがって、図が示すようにここでは大過去の時制が基準の時制になければならない。物語は作者と物語中の語り手が重なって、語りが煩雑にならないよ

うに、また、時（出来事）の順序が時制でわかるように、了解事項として過去（___下線）を歴史的現在のように用いて、時制を一つ現在側にずらして基準を作る。この過去を基準にして、物語中の出来事は大過去（_____下線）になる。

「㊦おいちどのは自分には母親であり姉である、おいちどへの気持も恋ではない、母が子を、姉が弟を、舐り庇う愛情にすぎない、……ここへ来てから二百幾十日、おいちどへのゆき届いた介抱を受けて、自分は初めて人間らしい、やすらかな、心あたまる日を過ごした、初めて生れてきた甲斐があったと思った。

“㊦ O-Ichi is a mother and a big sister to him. Her feeling isn't love for *him*. But it is affection she has for *him* like a mother cares about and protects her son and a sister her little brother. For the past two hundred and several dozen days, *he* has received warm care from o-Ichi and *he* has spent peaceful and heart-warming and human days for the first time in his life. For the first time indeed, *he* felt he had something to live for...

㊦では、直接話法で語られ、松助の生の声が聞えて来る。この生という臨場感を TL では生かす必要がある。ところが、口調は三之助のものである。時制は発話時の時制だから、おいちと三之助の關係の現状報告に用いる時制は現在形でよい（本来は、三之助の口調を借りているので、過去形が基本の時制となるべき）が（だから、TL を見ると現在形の生々しさが窺われる）、人称代名詞の扱いに問題が出て来る。ここでは、松助の語りであることを尊重して、三之助は第三人称にする（イタリック体）。

㊦……森さまはこう云ってお泣きなされました。

㊦ So honorable Mori said and wept.

㊦森さまは枕の上に顔を伏せて、泣きながら、この爺に頭を下げて、お頼みなされたのでござります」

① Honorable Mori, in tears, face on pillow, bent down to me, this old man, and asked me to look after her.”

①では、松助の報告が三之助の口調を借りずに、自分の口調に戻る。時制をレトリカルに用いることは避ける。

③ (⑤) あのを頼む、自分が死んだら紀平家へ戻れるようにしてくれ、あのを不幸にしないように、……このとおりだ、

He says: ⑤ Please take care of her. When I die, will you take care to make arrangements so she can go back to the Kihira family? Don't make her unhappy. I entreat you.

ここは、SLでは③のままであるが、TLでは、細工をしている。松助の口調から脱し、三之助の哀願ともいうべき懇願を活写するために、TLは描出話法をとって、生に近い声に変えている。上述のように、英語が時制というきびしさに縛られていながら、時間の意識の基調をリセットすれば、実際の時間軸とは違って、時制は自由に表現者の時間軸に従う。それを利用している。

【Text 10】

彼の言葉は会うたびに激しくなるばかりだった。

—もう貴女なしには生きてはゆけない、生きてゆきたくもない、どうか私のところへ来てください、紀平さんは、身分もよし裕福で、あんな可愛い子供まである、紀平さんにとっては貴女が全部ではない、しかし私には貴女が全部だ、貴女に別れるくらいなら私は死ぬことを選ぶ、私のところへ来てください、貴女にはこの気持ちがわかる筈だ、どうか私をこれ以上不幸にしないでください。

His words got bolder and fuller of passion every time he met her.

—I can't live without you, nor do I want to. Please come to me. Mr. Kihira is a

man of high standing and well off. He has that lovely boy. You are not everything to him, but for me you are. I would as soon die as part from you. Please do come to me. You must understand how I am feeling. Please don't make me any more miserable. (*Swallows*)

すでに、【Text 9】で見られたが、作者は、発話の息を切らせないように、そして意味の分断を遮るようにして、発話を畳み掛けて行く。英語で句点を用いなくて読点を用いれば poetic discourse が生まれるが、散文なので煩雑さを免れないだろう。

——もう貴女なしには生きてはゆけない、／生きてゆきたくもない、／どうか私のところへ来てください、／紀平さんは、身分もよし裕福で、あんな可愛い子供まである、／紀平さんにとっては貴女が全部ではない、／しかし私には貴女が全部だ、／貴女に別れるくらいなら私は死ぬことを選ぶ、／私のところへ来てください、／貴女にはこの気持がわかる筈だ、／どうか私をこれ以上不幸にしないでください。

— *I can't live without you, nor do I want to.// Please come to me.// Mr. Kihira is a man of high standing and well off.// He has that lovely boy.// You are not everything to him, but for me you are.// I would as soon die as part from you.// Please do come to me.// You must understand how I am feeling.// Please don't make me any more miserable.*

ここでは、文として取られる区切れで SL と TL を区切っている。これで見ると日本語の読点と英語の句点の違いはないように見える。羅列によって次々に吐露する思いは TL から削がれたようには思われない。なぜなら、結束性 (coherence) を作る言語要素 (cohesive elements) が代名詞, “he” “you” にあるからである。

4. 翻訳は文化受容

前節では、評価はコミュニケーションレベルを念頭に、私個人が設定した評価項目に関して、翻訳プロセスのなかで起きる言語操作や処理（「illocutionary”レベル、すなわち効果を求めて言語使用がなされるレベル、での問題」(Lefevere 1992: 17) 処理) の適切さをめぐって、自己評価の可能性を模索した。同根の言語や文化間での翻訳でも TL では乖離や喪失は起きる。異根のそれらの間では初めから翻訳困難、したがって、解決困難な問題が多い。対象にした分析は、自分の得意な点から評価を試みれば説得力もあり、コミュニケーション成立へつながる道も見出せるだろうという予想のもとに行った。選んだテキストごとの分析を見ると、問題処理がうまく行く行かないはあっても、illocutionary language の使用に着目しながら ST の空気（等価性）を TL に反映させようとする意識が翻訳時に働いていたと言える。しかし、今後、解決しなければならない課題として、今のやり方は、illocutionary language レベルに止まり、poetics へ、ideology へと志向する要素に欠けた感じを持つ。

<自己評価>が持つ他者不在の不安定性が最大の問題かも知れない。が、評価は自己評価から出発することは自明のことである。この不安定性を少しでも払拭する手立てを考えて、安定をもたらすようなストラテジーが必要である。

上述の Parks や Lefevere の TL 評価は鮮やかである。前者が英語の modernist writers のイタリア語翻訳を使って SL からの TL のなかでの乖離や喪失から翻訳評価を行い、後者は古典（ラテン語）詩1篇の英訳を一貫して用いて、翻訳実践と理論のあり方を語り、SL から TL への変換のときの問題処理（decision-making）にたいするストラテジーの明確さが見られるからである。つまり、審美的に偏りの強い ST を用い、また、韻文——これも散文と比べると偏りが強い——を扱うことで評価に方向性が示されて、適切なテキストを選んだ結果だとも言える。その点で山本周五郎作品では、genre novel（時代小説）としての評価がありテキスト選択には問題はない。が、

今後の分析のあり方を考えたとき、“illocutionary language” レベルだけでなく、もともと standard discourse からの逸脱を特徴とする「表現型」テキスト固有の poetics にまで decision-making process のレベルを広げて、その面で表現の特性から方向性のはっきりした評価ストラテジーを用いるべきであろう。

ストラテジーは、テキストの特性とは別の面でも考えられる。

Evan-Zohar sees translation as process of negotiation between two cultures: translation is acculturation. Following in the footsteps of the Czech scholar Jiri Levy, both also describe the translation process not primarily in terms of following and applying rules but as a decision-making process: translators decide, on their own, on the basis of the best evidence they have been able to gather, what the most effective strategy is to bring a text across in a certain culture at a certain time. ... The text of a translation has been called a culture's window on the world. (Lefevere 1992: 11)

翻訳は文化受容であり、そのための二つの文化の交渉プロセスと言う考え方があり。交渉や受容という限り、SL と TL が「自己」と「他者」というダイアログの関係においてそれらはなされるという点でここでもコミュニケーションは関わって来る。文化の規定は、“The text of a translation ... a culture's window on the world” であり、テキストの中の文化というよりテキスト自体が文化であることを言っている。そうであれば、文化的な側面からの山本周五郎の作品翻訳の評価の着目点は、テキストの文化的現象を扱っていることになる。前節での翻訳実践と分析は、SL の文化的現象が TL 文化に受け入れられるかの点で行ったと言い換えられる。テキストの一部を形成する文化ではなく、テキスト自体が文化であることをストラテジーの大枠におき、まず、ST という文化を空気として TT に反映させて（ここでコミュニケーションが成立する可能性がある）、それからテキストである ST 文化

を TT 文化に受け入れさせる。それが見えるようなストラテジーを模索することであろう。

しかし、翻訳者は無条件にただ TT を愉しみたいとする<読者 (spontaneous audience)>が現れるまでは、自己評価のなかで尽きない「言語ゲーム」を行っているのであろう。

参考文献

- Lefevere, André. 1992. *Translating Literature: Practice and Theory in a Comparative Literature Context*. The Modern Language Association of America: New York.
- 宮崎充保. 1992. 「Traduttore, Traditore : 日本の文芸作品の英訳の私論」山口大学教養部 紀要 26, 127-141.
- 1993. 「日本の文芸作品の翻訳 (1) : 補足と省略をめぐって」山口大学「英語と英米文学」第28号, 101-12.
- 2004. 「Serendipity! That's the Ticket: 文芸作品翻訳の評価規準の模索」『言葉のからくり』東京: 英宝社
- Munday, Jeremy. 2008. *Introducing Translation Studies: Theories and applications, Second Edition*. Routledge: London and New York.
- 中井久夫. 1985. 中井久雄著作集第3巻「翻訳の内と外—翻訳家でない翻訳者の覚え書き」『精神医学の経験 社会・文化』東京: 岩崎学術出版社
- Parks, Tim. 1998. *Translating Style: The English Modernists and their Italian Translations*. Cassell: London and Washington.
- Raffel, Burton. 1994. *The Art of translating Prose*. Pennsylvania State University Press: University Park, Pennsylvania.
- Reiss, Katharina. 1971/2000. *Möglichkeiten und Grenzen der Übersetzungskritik*. M. Hueber: Munich. Translated (2000) by E. F. Rhodes as *Translation Criticism: Potential and Limitations*. St Jerome and American Bible Society: Manchester.
- 1997/89. 'Text types, translation types and translation assessment', translated by A.

Chesterman, in A. Chesterman (ed.) (1989). 105-15.

鳥飼玖美子監修. 2009. 『翻訳学入門』 東京：みすず書房

作品

山本周五郎. 1949. 「桑の木物語」 キング1月号『あとのない仮名』（新潮文庫 東京：新潮社）

所載

—— 1950. 「つばくろ」 講談倶楽部8月号『扇野』（新潮文庫 東京：新潮社）所載